

# 長野市篠ノ井における 市街地を中心にしたタンポポ分布調査

橋 渡 勝 也

K. Hashido: Distribution of native and naturalized dandelions in Nagano city

## 1. はじめに

春の野を黄色くいろどるタンポポは、身近で親しまれている植物の一つである。このタンポポには、在来の日本タンポポと、明治年間にヨーロッパから渡って来て住み着くようになった帰化種のいわゆる西洋タンポポがあることはよく知られている。

この両者の分布を調査し、タンポポを通して環境を見直そうとする試みが、1970年代の半ばごろから各地で行われている(Ogawa 1979)。これらの調査は、専門家だけでなく多くの市民や学生も参加して行われている点に特徴がある。

筆者は、1981年より長野市篠ノ井の小学校に勤務したが、家庭訪問などで地域を歩いているうちに、在来と外来のタンポポの勢力分布に違いがあることに気づいた。1984年4月に、担任していた6年生の児童たちと『タンポポ調査団』を組織して、両者の分布を調査することにした。

## 2. 調査の概要

篠ノ井地区で見られる在来のタンポポはエゾタンポポ(*Taraxacum hondoense*)で、花を裏返してみると外総包片が直立して付いているのがわかる。一方、外来のタンポポにはセイヨウタンポポ(*T. officinale*)とアカミタンポポ(*T. laevigatum*)とがあり、共に外総包片はそり返って下を向く。また、関東以西の本州・四国・九州地方に多いシロバナタンポポ(*T. albidum*) (篠ノ井へは“国内帰化”したものと思われる)も見られるが、外総包片の特徴は在来のものと一致する。

上記の特徴を覚え、4月下旬から5月下旬の約1か月間、土曜日の午後や日曜祝祭日に、タンポポをさがして学区内のすべての道を歩いた。この方法をとったのは、①狭い地域での密度の高いデータを得ること、②自分たちの住んでいる地域の環境を自分の足で確かめてみることに、③タンポポを一つひとつ手に取って自分の目で見ることに意義を感じたからである。

子どもたちは、見つけたタンポポを識別し、五千分の一の地図に約2ミリの点(約10メートル四方をカバーする)として色分けして記録した。なお、精度

を高めるために、調査には必ず筆者が同行するようにした。

その後、授業で、地図に記された点から地区毎の在来と外来の分布比を算出したり、土地利用などとの関係について考察したりした。

また、「春の遠足」や「社会見学」で野外に出掛ける時には、必ず地図と色鉛筆を持つようにし、道端のタンポポを調べながら歩いた。

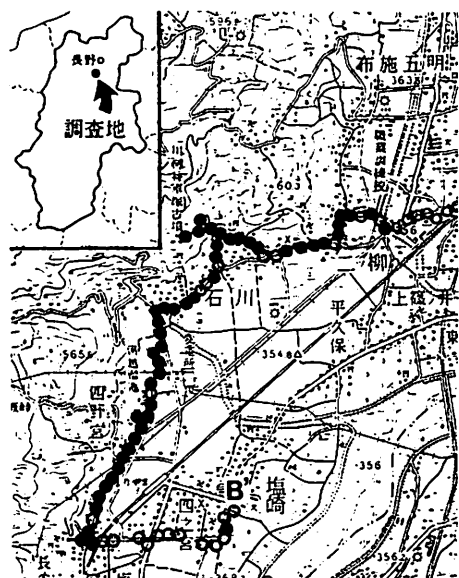
## 3. 結果及び考察

遠足及び社会見学で歩いたコース沿いの分布を図1に、学区内の分布を図2に示した。

学校から東へのルート(図1のA-A')では、篠ノ井の市街地では外来種、水田地帯や千曲川の堤防は在来種、松代町の街中は外来種、皆神山の桑畑周辺は在来種がそれぞれ優勢に分布していた。シロバナタンポポは2か所で見られた。

西のルート(図1のB-B')では、篠ノ井の市街地は外来種、水田地帯は在来種が主で、路傍の所々に外来種が見られた。塩崎地区の街中は外来種で占められていた。

学区内(図2)では、篠ノ井駅前の商店街から周



辺の住宅地では外来種、南の千曲川の氾濫原に広がる、古くからの農村地帯では在来種が優勢に分布している。シロバナタンポポは数か所に見られた。

外来種の生育地は市街地の路傍（アスファルトの割れ目やブロック塀との境のはやりや砂の溜った場所）や街路樹の根元、グラウンドなどに見られるが、在来種は、水田のあぜ、畑の路傍、リンゴ畑の下、堤防などに主に分布している。

すなわち、“在来種は、定期的な草刈りなどのゆるやかな人為的干渉の行われる農村的環境に生育する人里の植物の典型である。一方、外来種の生育地は、人間がつくり出した向陽地であるという点は共通しているが、地表の攪乱やコンクリート化など不定期の激しい人為的干渉の行われるところである。”という内藤（1975）や森田（1980）の見解と一致する。

図3は、地区毎に両者の点を数え、勢力比を求めたものである。この図は、全体の傾向としては1図と同じであるが、何年か後に同様の調査を行ったときの変化をみたり、その住人が他の地区と環境を比較してみるときなどに使ったりするには分布図よりもわかりやすい。

今回は、外来種のセイヨウタンポポとアカミタンポポは区別せずに表したが、現地での種子の色の観察ではアカミタンポポが圧倒的に優勢であった。在来種と外来種の勢力争いと同時に、外来種同士の競争もあるものと思われる。また、シロバナタンポポも、今後分布をどのように広げて行くか注目される。

#### 4. おわりに

1984年12月、長野市で開かれた信州生態研究会の



図1. 長野市篠ノ井の市街地を中心にしたタンポポの分布

研究発表会に、タンポポ調査団の代表児童がその成果を発表した。出席者から、「在来と外来の分布の違いがなぜ起こるのかを調べてみてはどうか」など次の段階につながる意見が寄せられた。また、「10年後20年後にも集まって、同じ調査をしたい。」と、成人してからも、自分たちが育ってきた地域のタンポポをみて行こうと意欲をみせている。タンポポ調査は、小川ら（1979）も言うように、調査者一人ひとりが実際の調査を通して、身近な環境のとらえ直しをし、自分は何をすべきか・何ができるのかを考え実行していける人間の育成をしていくのにきわめて有効な活動である。

筆者は、現在木曽郡の中学校で、新たに調査団をつくり活動しているが、調査範囲が広いので、本稿で述べたような、踏査して調べる方法では効率が悪い。新しい調査方法も模索しながら実践を積み重ねて行きたいと考えている。

#### 5. 参考文献

- 1) K. Ogawa (1979): Distribution of native and introduced dandelions in the Tokyo metropolitan area of Japan. Bull. Yokohama Phytosoc. Soc. Japan 16, 415 - 421.
- 2) 内藤俊彦 (1975): タンポポ属 (Taraxacum) の侵入と定着について, 生物科学27, 195 - 202.
- 3) 森田竜義 (1980): 「タンポポ」『植物の生活史』(堀田満編) 平凡社 58 - 67.
- 4) 小川潔・積田孝一・本谷勲 (1979): タンポポ調査の教育的意義, 環境教育研究 3, 63 - 75.



図2. 長野市篠ノ井のタンポポの分布

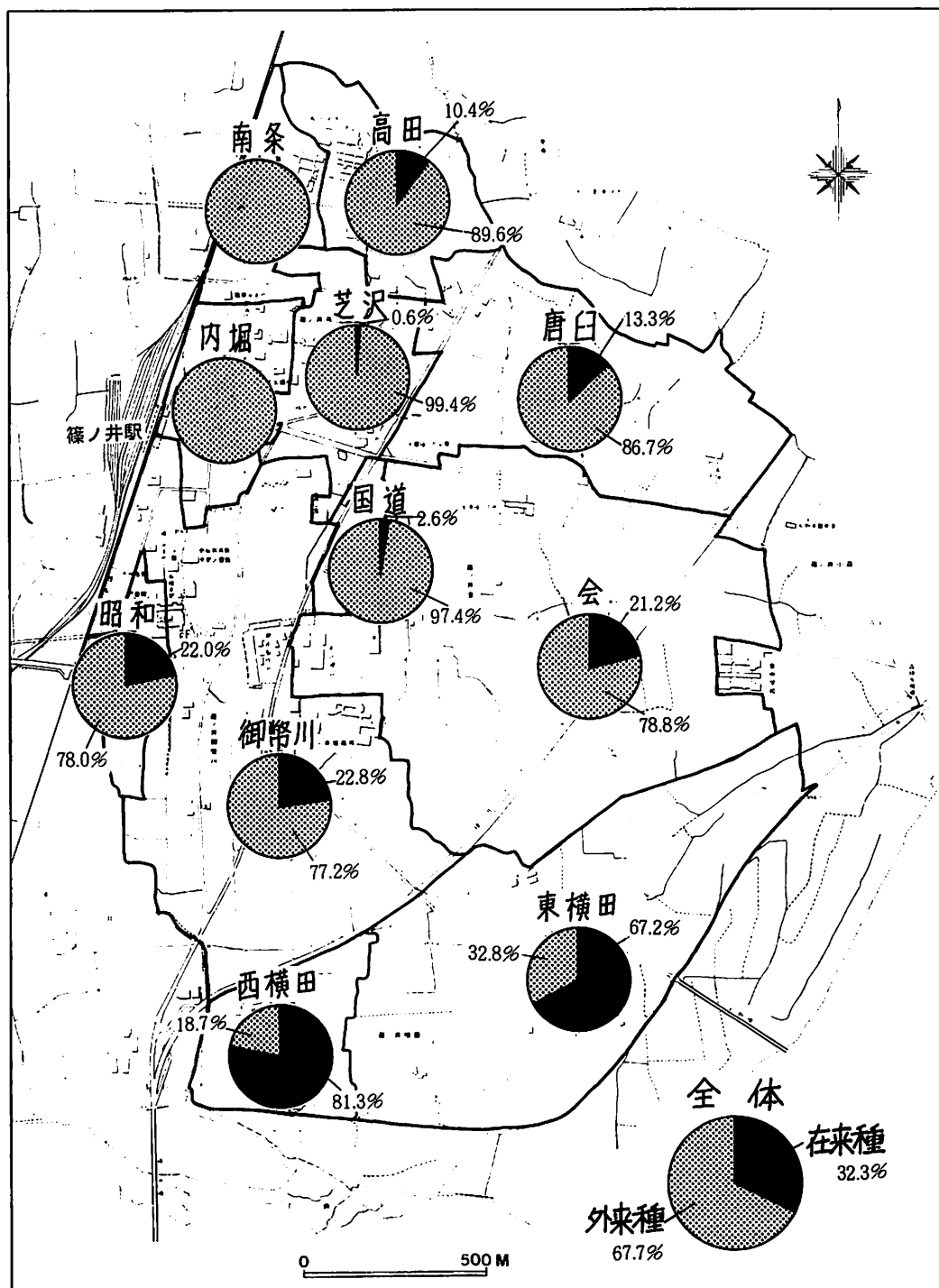


図 3. 地区別の在来種と外来種のタンポポの割合